

2019年のヤイトハタ種苗生産と二次飼育 (栽培漁業センター生産事業費)

山内 岬*・木村基文

平成 31 年度ヤイトハタ種苗の配付要望 (計 126 千尾・全長範囲 35~120mm) を満たす良質な種苗を生産するため大型水槽を用いた一次飼育 (種苗生産) と各要望サイズに達するまでの二次飼育 (中間育成) を実施した。

材料及び方法

(1) 一次飼育 (種苗生産)

2019 年 4 月 4 日から 5 月 6 日にかけて、栽培漁業センター (以下、栽培センター) または水産海洋技術センター石垣支所 (以下、石垣支所) で養成中のヤイトハタ親魚から得られた計 6,884g の受精卵を一次飼育に供した。4 月生産回次 (以下、1R 生産) の収容卵は、全て栽培センター親魚群から人工採卵により得られた卵を用い、5 月生産回次 (以下、2R 生産) の収容卵は栽培センターまたは石垣支所親魚群から自然産卵で得られたものを用いた (表 1)。

生産方法は、木村ほか (2017) による循環式種苗生産を採用し、飼育水槽として屋内のコンクリート製円形水槽 (容量 50kL×9 面) と八角形水槽 (容量 100kL×1 面)、ろ過沈殿槽として自然日照条件の同水槽 (容量 50・100kL×各 1 面) を使用した。ろ過沈殿槽は、飼育水槽と循環を開始する 41 日前に紫外線殺菌処理を行った砂ろ過海水 (以下、UV 海水) を貯水し、飼育排水に含まれる栄養塩類を吸収させる目的で少量の緑藻類 (アナアオサ) を投入した。循環水の流路は各飼育水槽から一次ろ過沈殿槽 (容量 100kL)、二次ろ過沈殿槽 (容量 50kL)、各飼育水槽の順になるように圧送ポンプを配置した。飼育水槽の注水条件は、卵収容から日齢 10 前後までは止水または UV 海水による微注水管理を行い、その後日間 0.3~0.5 回転/槽の範囲でろ過沈殿槽と循環させた。循環率は、仔魚の生残や水質状況に応じて徐々に増加させ、最大 2.0 回転/槽まで調節した。飼育期間中は、仔魚の浮上斃死や水面油膜の発生および蒸発による水量低下等を防止するため、水面方向に散水されるように設置した小型スプリンクラー (飛半径 1~2m・各 2 基/槽) を用いて微量 (毎分 1~

2L) の UV 海水を注水した。各飼育水槽の通気は、壁面付近に長さ 1m のユニホースを 5 本、エアストーンを 5 カ所、中央付近 1, 2 カ所に配置した。ストレーナーは水槽中央に設置し、成長や循環率に合わせて網の目合いを変更した。

初回給餌は、仔魚の開口が確認された日齢 3 の早朝に行いスーパー生クロレラ V12 (以下、SV12: クロレラ工業製) による 24 時間の栄養強化 (250~400mL/億個体/日) を行った S 型ワムシ大分株を 10~20 個体/mL の目標密度で与えた。水槽内のワムシ密度は、毎日朝と昼に計数し、飼育水中に残存するワムシの飢餓防止と照度調節および水質改善を目的として、自家培養した濃縮ナンノクロロプシス (細胞密度平均 28 億 cell/mL) または SV12 を適量添加した。仔魚の摂餌により、水槽内のワムシ密度が目標密度を下回った場合は、適宜栄養強化ワムシを追加給餌した。アルテミアは塩素処理により外殻を除去したユタ産アルテミアを使用し、仔魚が全長 4mm 以上に達した日齢 10 前後からふ化幼生を与え日齢 25 以降は、スーパーカプセルパウダー (クロレラ工業製) による栄養強化 (4~7g/千個体) 後の養成個体を 1~2 回/日の頻度で適量を与えた。海産稚魚用配合飼料 (銘柄: おとひめ・ラブラァバ) は、日齢 10 前後から少量の手撒き給餌を開始し、日齢 20 以降は、タイマー式自動給餌機 (DF-220B0 中部海洋開発社製) を水槽容積 50kL あたりに 1 台ずつ設置し、仔魚の成長と生残率に合わせて吐出する飼料の量と粒径および頻度を増やした。冷凍コペポダ (雅 1, 2 号: サイエントック社製) は、日齢 10 以降から与え、仔魚の成長に応じて量と回数を増大させた。また、生産期間中は各槽 1 日あたり 1 回の頻度で底質環境の改善と水質安定化を目的に貝化石 (ロイヤルスーパーグリーン, グリーンカルチャ社製) を適量散布した。

(2) 二次飼育 (中間育成) および種苗出荷

一次飼育で生産した種苗は、同様のコンクリート製 50kL 水槽に設置したナイロンモジ網 (縦 2m×横 3.5m×丈 1.5m:

*E-mail : ymuchimi@pref.okinawa.lg.jp

容量 10kL・縦 4m×横 4m×丈 1.5m : 容量 24kL・目合 : 3~5mm) に收容し、循環飼育または無ろ過の表層海水による掛流飼育(換水率: 1.0~1.5 回転/日) を行った。初期の池替えはいずれの飼育方法でも 3~5 日毎を目安に実施し、共食い防止を目的とした大小選別(スリット幅: 2.5, 3.0, 3.5, 4.0, 4.5, 5, 6, 7, 8, 10mm) を適宜実施しながら成長に合わせて最大 16 面の網で飼育した。掛流飼育の水槽には、海水殺菌を目的として銅イオン発生装置(和光技研社製)を設置し、水中の銅イオン濃度を 50~100ppb の範囲で維持した。

二次飼育開始初期の給餌は、主に市販のマダイ育成用 EP 飼料(銘柄: ノヴァ・マダイ EP メジャー) を与え、必要に応じて冷凍コペを適量(約 100g/日/網) 与えた。また、平均全長 70mm を超えた中後期にかけては、県内に水揚げされる生鮮マグロ類の加工残さが主原料の DP 飼料(銘柄: ヤイトハタ、沖縄県飼料協業組合製) を EP 飼料の代替として混合給餌した。配合飼料は、全てタイマー式自動給餌機(さんし郎 KS-05L・15L, 松坂製作所社製) を用いて与え、毎日の日の出直後から日没直前までに所定の給餌量が吐出されるように設定した。一次飼育の取揚直後から平均全長 50mm までの日間給餌率は、総魚体重量の 10% を目安に調整し、その後成長に合わせて段階的に 1~2% まで減少させた。要望サイズが全長 50mm 以上の出荷群は、全てコンペア式フィッシュカウンタ(大阪 NED マシナリー社製) を使った自動計数と

外観判別による形態異常個体の間引き選別を実施した後、各群から無作為に採取した 30 尾の体サイズを測定し、水産生産物譲渡規定に基づいて各要望者へ譲渡(出荷) した。また配付種苗の健苗性に関する情報を得るため、軟 X 線非破壊検査装置(M-60, ソフテックス社製) を用いた軟 X 線画像撮影を行い、脊椎骨異常と鰓形成不全個体の有無を観察した。

結果及び考察

(1) 一次飼育(種苗生産)

一次飼育における各水槽の生産成績を表 1 に示した。本年度は 2 回合わせて 11 水槽から合計 325 千尾の種苗を取揚げた。人工授精由来の卵を使用した 1R 生産は、收容した 5 水槽中 2 水槽で日齢 3 以降に多数の浮上斃死が観察され、生産中止事例が生じた。

(2) 二次飼育(中間育成) および種苗出荷

二次飼育期間中の生産成績を表 2、期間中の平均水温および育成数と收容密度を図 1 に示した。本年度は最大 250 千尾で育成を行い、うち 47.4% にあたる 119 千尾を養殖用種苗として配付に供した。飼育日数は、45~188 日間に及び期間中は計 129 回の大小選別を実施した。出荷選別作業中に間引いた形態異常魚と小型魚を含む出荷魚の生残率は 59.4% であり減耗率は 32.8% であった。毎日の死魚回収で死亡が確認され

表 1 平成 31 (2019) 年度のヤイトハタ種苗生産結果

生産回次 水槽名	1R							2R							合計 (平均)
	F-1	F-2	F-3	F-6	F-7	F-8	F-3	F-7	F-5	F-4	F-10	F-9	100-1		
水槽容量 (kL)	55							55							100
生産方法 (循環/掛流)	循環	循環	循環	循環	循環	循環	循環	循環	循環	循環	循環	循環	循環		
卵收容日 (月日)	4/4							4/27	4/30	5/1	5/3	5/3	5/6	5/6	
卵由来 (栽七/石垣支所)	栽七							石垣支所							
採卵方法 (自然/人工授精)	人工授精							自然産卵							
收容卵															
湿重量 (g)	880	418	548	783	552	442	247	778	357	511	446	393	529	6,884	
收容数 (千粒)	1,714	729	1,030	1,604	987	1,076	440	959	744	823	718	623	838	12,282	
卵径 (mm)	0.93							0.88	0.89	0.89	0.89	0.92	0.92	0.92	
gあたり卵数 (粒/g)	ND							1,781	1,845	2,084	1,610	1,610	1,584	1,584	1,728
正常胚発生率 (%)	92.4							18.0	85.0	41.0	41.0	98.0	98.0	67.6	
ふ化率 (%)	3.2	92.1	4.3	43.9	4.5	42.9	55.3	-	106.0	70.9	45.7	58.7	58.7	57.1	
ふ化仔魚收容数 (千尾)	55	671	44	704	44	462	243	649	792	583	328	365	492	5,432	
開始密度 (千尾/kL)	1.0	12.2	0.8	12.8	0.8	8.4	4.42	11.8	14.4	10.6	5.96	6.64	4.919	7.3	
取揚成績															
取揚日(廃棄) (月日)	5/10	5/13	4/8	5/10	4/8	5/13	5/31	6/4・12	6/1	6/10	6/10	5/28	6/14・21	-	
日齢 (日)	34	38	3	34	10	38	34	35・42	31	38	38	22	39・46	-	
平均全長 (mm)	19.2	19.8	-	15.1	-	21.4	18.9	16.5	17.4	16.8	19.8	-	23.7	18.9	
推定取揚尾数 (千尾)	5.4	26.8	-	21.6	-	9.7	14.8	88.3	3.3	22.8	16.4	-	116.3	325.4	
生産密度 (千尾/kL)	0.10	0.49	-	0.39	-	0.18	0.27	1.61	0.06	0.41	0.30	-	1.16	0.5	
生残率 (%)	9.7	4.0	-	3.1	-	2.0	6.1	13.6	0.4	3.9	5.0	-	23.7	7.2	
給餌等															
濃縮ナンノ (L)	62	66	102	63	9	71	71	86	64	75	76	44	129	916	
淡水クロレラ (L)	8	9	14	8	2	9	9	10	8	7	5	5	14	111	
S型ワムシ大分株 ^{*1} (g)	6,705	3,227	5,830	3,410	755	3,396	2,834	6,267	1,576	3,960	5,367	2,033	7,378	52,738	
ふ化アルテミア ^{*2} (g)	452	446	-	452	-	452	543	608	118	488	432	760	1,100	5,851	
養成アルテミア ^{*3} (g)	935	1,339	-	840	-	1,373	2,513	3,665	1,928	2,988	3,780	190	5,517	25,068	
冷凍コペボード (g)	2,456	5,239	-	2,806	-	3,826	2,445	6,492	252	3,761	3,762	1,034	20,508	52,581	
配合飼料 (g)	3,276	6,548	-	3,526	-	5,026	6,932	12,526	6,892	18,415	22,521	1,984	43,235	130,881	
貝化石 (g)	6,650	7,600	-	6,650	-	7,050	6,000	8,000	5,500	7,000	6,900	3,700	15,200	80,250	
一般水質(平均値)															
水温 (℃)	27.0	27.3	25.9	27.0	26.5	26.7	27.3	27.3	26.7	27.1	27.3	27.0	26.5	26.9	
溶存酸素量 (mg/L)	7.25	7.26	7.38	7.28	7.37	6.72	7.06	7.37	6.80	7.23	6.94	6.75	6.66	7.08	
pH (Unit)	8.31	8.23	8.42	8.30	8.52	8.19	8.05	7.92	7.95	7.89	7.76	7.99	7.74	8.10	
塩分 (psu)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
飼育用水	ろ過海水							ろ過海水							

*1 : 65.0g/億個体 *2 : 1,690g/1,000 万個体 *3 : 2,590g/1,000 万個体

表2 平成31(2019)年度のヤイトハタ二次飼育結果.

生産 回次	一次飼育			二次飼育													
	飼育 日数	生産数 (千尾)	飼育 日数 (日齢)	最大 (尾)	最大 (尾)	配付 (尾)	育成数 (尾)	処分 数	減耗 数	共食 ^{*1} (尾)	EP (kg)	DP (kg)	コベ (kg)	合計 (kg)	生残率 ^{*2} (%)	サイズ 選別数 (回)	
1-1	34	5.4															
1-2	38	26.8															
1-4	34	21.6															
1-6	38	9.7															
2-1	34	14.8	45~188 (49~218)	250,000	118,575	28,335	1,507	0	0	19,639	0	81,944	1,644	18	4,706	59.4	129
2-2	35・42	88.3															
2-3	31	3.3															
2-4	38	22.8															
2-5	38	16.4															
2-7	39・46	116.3															

*1: 共食=最大育成数- (配付+余剰+形態異常+小型+斃死+疾病) *2: 生残率= (生産数+形態異常+小型) / (最大育成数-生種調整) *100.

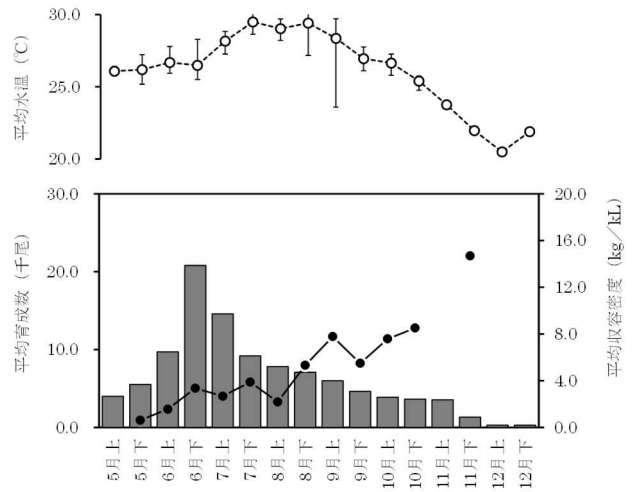


図1 平成31(2019)年度ヤイトハタ二次飼育期間中の平均水温および育成数と収容密度の推移。上段の誤差範囲は各期間に記録された水温の最大値と最小値を示す。下段は棒グラフが各期間の育成数の平均値を示し、折れ線が大小選別または出荷時の体サイズ測定結果から推定した収容密度の平均値を示す。

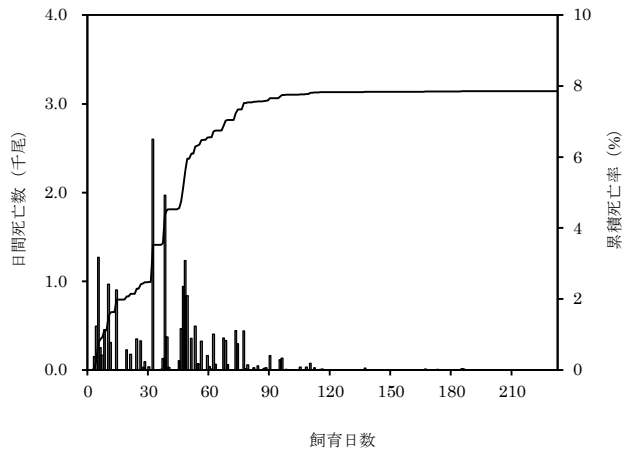


図2 平成31(2019)年度ヤイトハタ二次飼育における死亡魚の発生状況。棒グラフが日間死亡数を示し、折れ線が累積死亡率を示す。

い減耗率を示したことから(図2), 全長70~80mmに達するまでの共食い行動の抑制に課題が残された。二次飼育期間中に与えた給餌量の合計は4,707kgに達し、飼料種別の重量内訳はEP(単価:346~437円/kg)が64.7%, DP(単価:175円/kg)が34.9%および冷凍コベ(単価:2,000円/kg)が0.4%であった。また、出荷魚の総重量は計3,915kgであったことから、出荷魚1.0kgあたりの生産に要した飼料は1.2kgであった。

水産生産物の譲渡手続きは、県内各漁協に所属する経営体を含む者に対して行い、合計38件の出荷作業を実施した(表3)。変更後の種苗要望数に対する配付数の充当率は、平均114%であった。また、栽培センターで実施した平成31年度放流技術開発事業に供する放流用種苗として21千尾、低コスト型循環式種苗生産・陸上養殖技術開発事業の養殖試験種苗として67千尾を供した。

た個体は、そのうち7.9%と少なく、大半が死魚を回収できなかったことから、共食いによる死亡が主な減耗要因であると推察された。特に、いずれの生産回次においても飼育開始30日以内は頻繁な後追い行動と共倒れによる斃死魚が確認され、高

表3 平成31(2019)年度ヤイトハタ種苗の譲渡結果

種苗要望者	要望尾数		件数 (回)	配付数 (尾)	充当率 (%)	配付サイズ (mm)			総重量 (kg)	譲渡時期
	(当初)	(変更後)				平均値	最大値	最小値		
県内漁協 (沖縄島周辺)	48,750	22,800	9	25,080	110	110	160	58	637	2019年7~9月
県内漁協 (石垣島)	47,000	57,000	12	69,100	121	75	128	29	548	2019年6~9月
民間企業	5,500	5,250	2	5,775	110	122	148	92	182	2019年8・9月
財団法人	20,000	12,000	2	13,200	110	131	154	101	561	2019年9・11月
試験研究機関	4,700	5,110	8	5,420	106	114	171	50	103	2019年9~12月
栽培セ (養殖試験用)	-	6,700	3	6,700	100	153	187	114	335	2019年10~12月
栽培セ (放流試験用)	-	20,000	2	21,635	108	157	197	106	1,549	2019年11月
合計	125,950	128,860	38	146,910	114	-	-	-	3,915	

軟X線画像の撮影は、種苗出荷を行った者のうち54%にあたる14者で実施し、平均全長90.8~133.7mmの出荷群から計450個体を観察した。その結果、各出荷群の脊椎骨異常個体の出現率は平均8.4%(範囲:3.3~16.7%)、鰭形成不全個体は平均4.7%(範囲:0~20.0%)であった。脊椎骨異常個体の多くは椎骨の癒合や屈曲・変形を伴う軽度の前弯症であり、いずれも外観判別では正常魚と識別困難な個体が多かった。異常が生じた椎骨の77.2%は腹椎(第1~10椎骨)、22.8%は尾椎(第11~23椎骨)で生じていることが確認された。

文献

木村基文, 山内 岬, 岸本和雄, 2017: ナンノクロブシス 培養水槽をろ過沈殿槽として利用したヤイトハタの循環式種苗生産. 平成27年度沖縄県水産海洋技術センター事業報告書 76, 126-134.